



〈書評〉 竹内真彦著『最強の男 三国志を知るために』（春風社 二〇二〇年 二六三頁）

井口, 千雪

(Citation)

未名, 42:25-35

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504949>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504949>



〈書評〉

竹内真彦著『最強の男 三国志を知るために』

(春風社 二〇二〇年 二六三頁)

井 口 千 雪

中国三国時代を題材とするコンテンツは、現代に到るまで、中国のみならず日本においても盛んに生み出され、愛され続けている。それらが基づく所は、一般的に言って、歴史書に記された「史実」というよりも、史実に虚構（フィクション）を織り交ぜた「小説」、即ち明末元初に戯曲作家羅貫中の手によって執筆されたという『三国志演義』（以下『演義』と称す）であろう。

『演義』の作者の語り口は非常に巧妙で、史実から大きく乖離せぬよう気を配りながら、伝説・藝能の世界で伝えられて来た物語や人物像をも上手く取り込み、魏・呉・蜀三国の物語を行ったり来たりしつつ、読者を飽きさせることなく物語の世界に誘う。竹内氏も強調するように（本書六頁）、もしもこの小説が世に生まれなかったならば、三国志の物語はここまで広範囲に普及し得なかったと言っても過言ではない。実際に、『演義』は現代においても、様々なコンテンツに姿を変えて楽しまれているのである。

しかし、小説の『演義』そのものは、少なくとも現代日本においては、さほど多くの読者を持っていない。『演義』の素材となった伝説・藝能における三国志物語も、一般的には顧みられることはない。現代の三国志ファンの興味

のベクトルは、歴史書に記された史実に向かっているようである。

虚構の世界から入り、史実を知って満足するという楽しみ方は、もちろん肯定されるべきものである。が、文学者の視点からすれば、何故虚構の物語が生み出されたのか、そこには人間のどのような心理が投影されているのか——といった問題を考えることにも、人文学的な面白みがあり、それが世間には十分には伝わっていない現状が、いささか口惜しくも感じられるのである。

三国志研究の末席を汚している筆者の場合、高校時代に北方謙三氏の小説『三国志』を読み、三国志の世界に足を踏み入れ、吉川英治『三国志』を読んでさらに深みにはまる。とりわけ諸葛孔明の生き方に多大なる感銘を受け、中国文学を志した大学時代には、まずは正史『三国志』及び裴松之注に記された諸葛孔明像を確認して、満足を得たものであった。しかし、講義や演習を通じて、『演義』諸版本の本文異同の校勘を行ったり、『演義』以前に存在した民間伝承や戯曲テキストを学ぶうちに、各時代、各コミュニティに、様々な孔明像が存在したことを知る。経国済民への強い思い、主君への厚い忠義、隠遁生活への心残り、自己との戦いなど、それぞれに強調される部分も異なっていた。三国時代から一千年以上の時が過ぎゆく間に、どれほどの人が孔明を慕い、或いは孔明に自己を投影し、孔明の生き方に感化されたのかといったことに思いを馳せ、自分が何故孔明に惹かれたのか、自己が理想とする人間像とは何なのかを考える機会も得た。この竹内氏の著書は、上記のような三国志物語の楽しみ方を、現代の三国志ファンに対して啓蒙するものであろう。

さて、本書でとりあげるのは、「呂布」の人物像の形成過程である。現代の三国志コンテンツの拠り所となっている『演義』における呂布と言えば、序盤の中心人物として登場し、(後に関羽の愛馬となる)赤兔馬に跨がり、方天戟をふりまわす勇猛な男で、向かう所敵無しというほどの武力を誇るが、一途な所もあり、「連環の計」にはまっ

貂蟬に恋慕の情を抱き、それによって義父董卓を殺害する（貂蟬は後に呂布の妾となる）。最終的には、智謀に欠ける事が仇となり、身を滅ぼしてしまう。どこか不完全な所を持ち合わせている所が憎めず、愛されている人物と言えようか。

しかし、このような呂布の人物像は、必ずしも史書の中に見出せるものではない。陳寿『三国志』及び裴松之注には、呂布が勇猛な武将であったこと、愛馬が赤兎馬であったこと、義父董卓を殺した事は確かに記されているが、（i）呂布が三国一の「最強」というほどの武力を持つ男であること、（ii）貂蟬との恋愛劇を繰り広げてその夫となること、（iii）赤兎馬が関羽に譲られること、（iv）方天戟を武器とすること、といった要素は、すべて史実ではなく、虚構である。では、これらの虚構はどのような意味を持つのか（第一―四章）、そして、何故呂布について、そのような虚構の世界が繰り広げられたのか（第五章）、本書はこの謎を解き明かして行く。

第一章では、呂布＝万夫不当の勇猛な將軍、というイメージが定着していることについて、その由来を考察する。確かに正史『三国志』において、呂布は「飛將軍」（機敏で勇敢な將軍）と称された前漢の李広に準えて「飛將」と称されている。呂布が李広と同じく、腕力が強く、弓術・馬術にも秀でていたことによるであろう。

しかし、現代の三国志ファンに対して、より呂布の「最強」たるイメージを印象づけているのは、『演義』における呂布の最初の見せ場、即ち「反董卓聯合軍」として集まった十八路諸侯と、虎牢関で対峙し、呂布が張飛・関羽（と劉備）という猛將を一人で退けるほどの武力を発揮する場面であろう（第十則）。これは史書には存在しない物語なのであるが、『三国志平話』（以下『平話』と称す）や雜劇のテキストにはすでに見られ、「三戰呂布」の名でよく知られている。但しそちらでは、呂布は三人と戦ったあと虎牢関に退き、翌日再び出陣して、張飛と一騎打ちを行い、今度は張飛が一人で呂布を撃退するという「独戰呂布」（或いは「單戰呂布」）の話が存在しており、これも広

く知られた話であったものとみられる。『演義』の作者はこの「独戦呂布」を省略したことになるが、それは、『演義』成立以前の三国志物語で主役と言えるほど破天荒な活躍が語られていた張飛の活躍が、『演義』では矮小化されるという傾向があり（小川環樹・金文京氏・井波律子が指摘）、その一環と考えられる。結果、『演義』では呂布は決して勝利するわけではないが、張飛と関羽とが協力せねば撃退できなかったという所で話が終わることになっており、呂布が「最強」の人物として印象づけられることになった。

このこと一つをとっても、呂布という人物を考える上で、史書を確認するだけでは不十分であり、小説、さらにその元になった民間伝承を合わせて考えることで、より十分に理解することができるといえることがわかる。

第二章では、呂布と貂蟬の関係について考察する。『演義』における貂蟬は、「連環の計」によって董卓と呂布とを仲違いさせ、呂布が董卓を殺害するよう事を導く。その目的は、自らを養ってくれた王允の恩義に報いること、及び漢室の危機を救うことにあった。これは現代日本の三国志コンテンツでも欠かせぬエピソードとなっており、「烈女」貂蟬というイメージはかなり強固に根付いている。

しかし、史実においては、正史『三国志』「呂布伝」に、呂布が董卓の侍婢と密通しており、それが発覚するのを恐れていたこと、呂布が董卓殺害を計画する王允に与して実行したこと、「董卓伝」に呂布が董卓を殺害した経緯の詳細は語られているが、「貂蟬」という女性の記載はどこにも見られない。ならば『演義』作者が史実を元に創作したものかと言うと、そうではなく、『平話』と雑劇「連環記」にすでに貂蟬が登場している。

ここで注目されるのが、『平話』と雑劇では、呂布と貂蟬は元来夫婦であり、戦乱により離散したという設定で語られている点である（高橋繁樹の指摘）。『演義』においても、貂蟬は後に呂布の「妾」として再登場し、陳宮の計に従い出陣しようとする呂布を止めようとする場面があるのだが（第三十八則）、呂布を騙して連環の計を完遂させ、

もはや役目を終えたはずの貂蟬が、後に呂布の妾に収まっていることには、やや違和感が感じられる。竹内氏の考えでは、これは、『演義』が物語の主題を「呂布と貂蟬の夫婦重円」から「忠臣王允による董卓殺害」へと変更しながらも、呂布と貂蟬は夫婦であるべきという認識が広く共有されており、やはり呂布と貂蟬の絆を完全には抹消し難かったことによると言う。確かに、現代中国においても、京劇「呂布與貂蟬」の演目に見られるように、「連環の計」は呂布と貂蟬の恋愛譚として受容されている側面がある。人々は呂布という男に、貂蟬を一途に愛して董卓から救おうとした、愛すべき人物という属性を見出してやまなかったということである。

第三章では、呂布の愛馬、赤兎馬について考察する。赤兎馬と言うと、関羽の愛馬であることを想起する人も多いだろう。しかし、正史『三国志』には、「呂布伝」に呂布が「赤兎」という駿馬を所有していたとする記載は確かに見えるが、関羽が赤兎を所有していたという記録は見えない。一方、『演義』においては、呂布の死後に赤兎馬は関羽の手に渡り、関羽の死後には孫権に献上されるが、数日間秣を食することなく死ぬという劇的な最期を迎えており、二君に見えずという関羽の義を体现する存在となっている。

語り物藝能の世界においても、すでに、赤兎馬は呂布から関羽の手に渡り、関羽の生命を象徴するものとして語られていたようである。『平話』には、呂布の部下の侯成が、呂布の馬を盗んで曹操に寝返り、馬を関羽に献上するというエピソードがあり、この馬が赤兎馬であるとは明記されていないが、それ以前に呂布の愛馬として赤兎が登場していることから、呂布の馬と言えは赤兎であるはずで、関羽に渡った馬も赤兎であると認識されていたものと推測される。また、明代の成化説唱詞話『花関索伝』には、赤兎馬は関羽の愛馬として登場し（呂布はそもそも本作品に登場しない）、関羽の死の場面では、赤兎が関羽の刀を引きずって河の中に入るという描写でもって関羽の死を象徴的に表現している。伝説の世界において、赤兎の呂布から関羽への移譲、および関羽の愛馬としての物語が

生まれ、それが広く知られていたが故に、『演義』もそれを取り込んだのであろう。

ところで、関羽が神としても信仰されることは周知の通りであろうが、呂布の愛馬の赤兎馬が、神・関羽の手に渡り、生命の象徴となることには、どのような意味があるのだろうか。竹内氏の解釈では、赤兎馬はその所有者に「最強」たる武力を与えるモチーフなのであり、呂布から関羽の手へ赤兎馬が移ることで、「最強」の武力も移譲されるのだと言う。呂布の愛馬、赤兎馬は、史実から大きく飛躍して、神話的なモチーフとなったのである。

第四章では、民間伝承の世界及び『演義』で呂布が持つ「方天戟」という武器の意味、また呂布と李肅との対の關係に着目して、伝説・藝能の世界で享受されて来た呂布像に迫る。

まず李肅について、正史『三国志』「魏書・董卓伝」には、呂布が董卓を殺害した際に、同郷であった李肅が協力したという記述があるが、それ以外に李肅と呂布との關係性を語る記載はない。一方、『平話』や雜劇では、李肅は呂布の相棒として早くから登場しており、『演義』もそれを基本的には踏襲している。

そして、竹内氏の指摘する所で

は、『平話』・雜劇・『演義』において

呂布と李肅が持たされているモチーフは、同じく伝説・藝能の世界で語られていた、唐代の武将、

薛仁貴と葛蘇文の持つモチーフと共通点が多く見られるという。方

天戟もその一つである。以下の表

		【表】					
		呂布		薛仁貴		史書	
		方天戟	東髮金冠 (三叉束髮紫金冠)	方天戟	白袍	史書	征遼 事略
李肅	赤兎馬	○	○	○	○	○	○
	白袍	×	×	×	×	×	×
葛蘇文	赤兎馬	○	○	○	○	○	○
	白袍	×	×	×	×	×	×

※「？」は本書に記載が無い。

に竹内氏が挙げる共通点を整理する。

薛仁貴は言わずもがな実在の武將・政治家で、「薛仁貴征遼事略」（『永樂大典』卷五二四四）や雜劇の主人公として人氣を博した英雄でもある。一方の葛蘇文は、民間伝承において、薛仁貴の敵手として登場する人物である。その原型は、『旧唐書』『新唐書』などの史書に散見される高句麗（高麗）の重臣で、貞觀十六年（六四二）に主君たる高句麗王の高武を殺し「莫離支」の地位に就いた、淵（泉）蓋蘇文であるとみられる（『旧唐書』『太宗紀下』・「東夷伝高麗」）。しかし、史書には薛仁貴と蓋蘇文（葛蘇文）が直接戦ったという記載はなく、「征遼事略」や雜劇にあるような、薛仁貴が蓋蘇文（葛蘇文）を射殺したという記録も無い。おそらく、蓋蘇文が治める高句麗と幾度も戦った「英雄」薛仁貴の物語が、伝説・藝能の世界で膨らんでいく内に、二人の物語や彼らの持つモチーフが生み出され、それらは「英雄性」を象徴するモチーフとなり、定着したものと思われる。

この二人の対、そして彼らの持つモチーフが、呂布と李肅に転用されたということになるのか。逆に言えば、三国志物語における呂布・李肅の対、また彼らが持たされているモチーフは、その伝説・藝能の享受者たちに、薛仁貴の「英雄性」を想起させるものであった可能性がある。

それを証明する例の一つとして、竹内氏は、『水滸伝』第三十五回「石將軍村店寄書 小李広梁山射雁」に登場する二人の好漢、小温侯呂方と賽仁貴郭盛という対を挙げる。「温侯」は史実として呂布の爵位であり、「賽仁貴」は「薛仁貴に比肩する」の意味である。さらに「小温侯」呂方の装束、即ち三叉冠・百花袍・赤馬・画桿方天戟は、明らかに呂布に準えられており、「賽仁貴」郭盛の装束、素羅袍（素は白色）・方天画戟は、明らかに薛仁貴に準えられている。呂布と薛仁貴が、「英雄性」を象徴するモチーフによって、同一視とまでは行かずとも、意識下で結びつけられていたことは間違いないまい。

さらに、呂布、薛仁貴、また『水滸伝』で呂方と郭盛の争いを止めに入る好漢、花栄が、みな弓術に巧みな人物であることに注目し、「英雄性」の祖型を前漢の李広に求める点も、竹内氏の独創的な視点である。

さて、第五章では、第一～四章で述べてきた「虚構」が、呂布に付与された根源的な理由を考察する。確かに史書においても、呂布は腕力に秀で、弓術に巧みであったという記載があり、李広に準えて「飛将」と称されていることは事実である。しかし、伝説・藝能の世界において、関羽・張飛の二人を撃退するほどの武力を持ち、悲劇の女性貂蟬との恋愛譚の公子となり、愛馬赤兔馬は神として祀られる関羽の手に移譲されることになり、漢民族にとって「英雄」と称して違いない薛仁貴を想起させるようなモチーフを持たされることになったのは、一体何故なのか。竹内氏はその根源的な理由を、呂布が「父親殺し」という悲劇性を有することに求める。

呂布は義父の董卓を殺す。史書の董卓に対しては多面的な評価があり得るものの、物語世界での董卓は、悪逆非道の「暴君」として語られる。「悪逆非道の父を殺すのは禁忌なのか？父が多くの人々の生命を危険に晒すような存在である時、その息子が人々を救うために自らの父を殺す。その行為は称されるべきか？非難されるべきか？…」（中略）…このような葛藤の渦中に置かれた人物は否応なく悲劇性／英雄性を帯びるであろうことは、想像がつく」（本書一六四頁）。

そして、呂布が「父親殺し」によってある種「神格化」されたことを裏付ける根拠として、元代～明代に民間で信仰されていた宗教的人物の列伝と神仙事跡を記載した『三教源流搜神大全』という書物に見える道教系の武神、「太歳殷元帥」の図像（本書一六六頁図六）が、『平話』上図や『演義』（毛宗崗本）挿絵に描かれる呂布の姿に酷似していることを指摘する。「太歳殷元帥」の原型は、古代中国の天文曆学において設定された架空の惑星「太歳」で、これが神格化されて太歳信仰が生まれた。さらに変遷を経て人格神となり、殷の紂王の息子で、父である紂王を打

倒するために武王を助けた人物だと語られるようになる。『三教源流搜神大全』本文に拠れば、「太歳殷元帥」は武器として黄鉞を振るうと言う（『史記』『周本紀』に武王が殷誅伐に際し黄鉞を杖つき誓約を立てたとあることから、黄鉞は殷誅伐を象徴する武器とみなされていたものと考えられる）。しかし、実際の図像では鉞（大斧）というより、呂布の持つ方天戟に近い。これは、殷元帥と呂布が共に暴君であった父を殺したという共通点を持つが故に、物語世界において両者が混淆し、両者の武器も同一の形をとるに至ったためであると考えられる。

呂布は、義理の父親董卓という暴君を殺したことにより、伝説・藝能の語り手、及び享受者たちによって、悲劇性・英雄性を有する人物として認識された。そのために、「英雄性」を帯びた虚構の物語・モチーフが膨らんで行った。そして、それが『演義』に集約されることとなり、現在の我々が知る所の人物像が形成されて行った、とするのが、呂布の人物像の形成過程についての、本書の結論と言えよう。

但し、本書が意図する問題提起は、もっと大きな所にあるものと思われる。従来、『演義』は『平話』よりも合理化され、史実に反する記述を少なくしたものとされてきたが（小川環樹の指摘）、部分的には逆の方向性、つまり『平話』または雑劇、語り物藝能に見られるような民間伝承を少なからず取り込んでいたのであり、「この現象は、『史実』というものが鞏固であるのと同時に、「伝説」もまた鞏固であることの証明とも言え」る（本書一一三頁）。この指摘は、文学研究において非常に啓蒙的なものである。

民間伝承の世界では、歴史書にどのように書かれているかということとは、さほど大きな問題ではない。人々は、歴史上の人物について伝わるわずかばかりの伝聞から、空想を膨らませ、そこに自分たちの理想を投影し、物語を紡ぎ上げて行く。物語には、「出発点となる原因／動機（因）」があり、それに従った行動があり、その行動の結果（果）がある。その結果は新たな原因／動機を生み、…（中略）…物語は展開してゆく」（本書五〇頁）。その前後の繋がり

が失われずに、語り手が虚構を紡ぎ出して行くわけであるが、その虚構は、語り手の独断で創られるわけではない。物語の享受者である人々の希望・理想もが反映されるものである。

故に、一つ一つの虚構のモチーフには、どのような意味があるのか、何故それが附加されたのか、それを考えることは、三国志物語を語り継ぎ、享受してきた人々の「思考」を辿る作業でもあるのだ。それを辿る過程で、人間とは何かということを考えるのが、文学を研究する意義でもあり、本書が訴える主張であると、筆者は感じる。

最後に、本書に収められるコラム十一篇、「附章」全二章についても言及しておきたい。これは、『演義』研究の近年に至るまでの動態を、一般の読者にも非常にわかりやすくまとめたものとなっている。

まず、コラムの構成は以下の通りとなっている。

- 一、 姓名字
- 二、 暦
- 三、 後漢の行政区分
- 四、 干支
- 五、 五行説
- 六、 八健将
- 七、 諡号と廟号
- 八、 『資治通鑑』と『資治通鑑綱目』
- 九、 『三国志平話』
- 十、 雑劇
- 十一、 『花関索伝』

これらは、『演義』を研究する際に知っておくべき基礎知識を簡潔に述べたものである。

「附章一 陳寿と裴松之」では、歴史書に記された事跡や人物評価に対して、批判的な目を持つことの重要性を説く。諸葛亮に対する評価を例に挙げれば、『三国志』「蜀書、諸葛亮伝」の陳寿による評は、諸葛亮は戦で結果を残せず、臨機応変の軍略は得手でなかったと言うが、『晋書』「陳寿伝」は、陳寿は私意により諸葛亮を否定的に評価したのだと述べており、諸葛亮の評価が割れていることは知られている。これについて、竹内氏は、『晋書』編纂の勅令が房玄齡に下ったのが唐の貞観十七年（六四三）、完成したのは同二十年（六四六）であるから、この間に諸葛亮に対する知識人像の評価が高まっていき、それが『晋書』に現れたと考えるのが妥当であるとする。また、陳寿「三

『三国志』とともに読まれる「裴松之注」について、裴松之は自身が引用した資料について、「史之記言。既多潤色」、つまり「史官」が事を記録する段階で、すでに潤色が多く、そのため同時代に近い記述であつても事実でないものがあると言っていることを指摘する。歴史書に記されていることは「史実」であるが、「事実」であるかどうかは別の話であり、史料批判は欠かせないということは忘れてはならない。

「附章二 羅貫中と毛宗崗」では、『演義』の諸版本の書名、作者の問題、そして『演義』諸版本の系統について、簡潔にまとめられている。今や『演義』を研究しようと思えば、まずは版本の系統や本文の異同の概要を理解しておかなければ手が付けられないという状況になっているが、これが複雑を極めており、『演義』研究に興味を持った学生などにとって大きなハードルとなっている。最終的には、中川諭氏の大著『三国志演義』版本の研究（汲古書院、一九九八年）や、僭越ながら筆者の『三国志演義成立史の研究』（汲古書院、二〇一六年）などを読みたい所ではあるが、いきなりこれらの研究書を読んで大要を理解するのは困難であるかもしれない。その点、本章は、近三十数年来の研究で論じられて来た学説が非常にわかりやすくまとめられており、これから『演義』研究を志す者に大いに資するものとなっている。

『演義』研究の入門書として、金文京氏の『三国志演義の世界』（東方書店、一九九三年初版、二〇一〇年増補版）以来、近年刊行された井上泰山『三国志への道標』（関西大学出版部、二〇一九年）に続き、本書は必読の書となるだろう。